

ISSN 2434-9690

# 東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会  
2020年1月

# 目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
<b>[特別寄稿]</b>	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
<b>[対照研究]</b>	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
<b>[日本語研究]</b>	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
<b>[中国語研究]</b>	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

# 中国語の時量詞構文における焦点について<sup>1)</sup>

## On the Focus Structure in the Durative Construction in Chinese

福本 陽介  
FUKUMOTO Yosuke

### Abstract

This paper will consider which constituent in the Durative Construction in Chinese would be prominent (in other words, focused), observing the focus structure of the sentences under discussion, putting them into certain contexts. At first we will observe that a couple of foci may appear in one sentence at the same time in an appropriate context. Then, adapting the theory of information structure and assuming several subtypes of foci (informational focus, contrastive focus, and corrective focus among others), I will propose a scheme of the focus structure in the Durative Construction and claim that it is the durative constituent that is focused in the Durative Construction through an experiment utilizing the *Shi* Construction, a focal construction in Chinese.

キーワード：時量詞構文 情報的焦点 対比的焦点 訂正の焦点 「是」構文

### 目次

1. はじめに
2. 焦点について
3. 「是」構文と時量詞構文
4. まとめ

---

<sup>1)</sup> 本稿の作成にあたり、林敬三氏、許容瑜氏、単艾婷氏、顔君蓓氏、陳璐氏、夏思洋氏、賈伊明氏、魏婉氏、施勗程氏、王彤羽氏、高苗青氏、蔡閔紋氏から貴重なアドバイスやコメントをいただいた。また、本研究では北京語話者及び台湾華語話者へのヒアリングを主たる考察方法とした。多様な言語事実を引き出すため、インフォーマントとの対話を通じて多数の作例を使用している。さらに、匿名の査読者から、例文の妥当性や、中国における「是」構文と時量詞の関係にかかわる先行研究などについてご教示いただいた。本稿はもっぱら西洋言語学のアプローチを採用しており、すべてのご指摘を反映できているわけではない。紙幅の関係で検討できない事項については今後の研究課題としたい。以上の方々はこの場を借りて謝意を表す。

## 1. はじめに

中国語の時量詞構文は(1)のように「時量詞+ (的) +目的語」構造をもつ。

(1) 我学了两个小时 (的) 中文。(私は2時間中国語を勉強した。)

この構文では、目的語は(1)のように単純な名詞句が好まれ、(2)の属性規定的連語、(3)の特徴規定的連語や(4)の關係的連語などの複合名詞句は好まれない。

(2) ?\*我看了两个小时 (的) 很厚的书。(私は厚い本を2時間読んだ。)

(3) \*我煮了三十分钟 (的) 皮很硬的茄子。(私は皮の硬い茄子を30分煮た。)

(4) ?\*我看了两个小时 (的) 最近出版的书。(私は最近出版された本を2時間読んだ。)

本稿は、なぜ同構文において(2)-(4)のような複合名詞句が容認されないのかを、構文の焦点構造に注目して議論する。「的」は名詞修飾構造においてカザリとカザラレを結合するはたらきがあるが、一般的にカザリがより高い情報的価値を担うと考えられる。たとえば「很厚的书」「皮很硬的茄子」「最近出版的書」において情報的焦点となるのはカザリであり、カザラレにあたる「本」や「茄子」が情報的焦点になるとは考えにくい。(適切な文脈があれば対比的焦点となる可能性はある。)

文の情報構造の観点から見ると、文中における焦点は1つだと考えられる(Rizzi 1997, Bocci et al. 2019)。本稿では、時量詞構文における焦点位置について「是」構文を利用した実験を用いて考察し、目的語に複合名詞句が生起できないのは、目的語の連体修飾語以外の部分が焦点となっているからであり、その焦点は時量詞であると主張する。

## 2. 焦点について

### 2.1 焦点・断定・前提

議論に先立ち、まずは焦点とは何かを概観しておく。Li 2008 は焦点(focus)、断定(assertion)、前提(presupposition)という概念を、Lambrecht 1994 に倣って定義している。焦点とは、語用論的に構造化された命題の意味部門であり、それによって断定と前提とを区別しうるものを指す。断定とは、聴者が知っている、またはある文が発話されたときにそれを当然のことと判断すると期待されるような、文によって表現された命題のことである。また、前提とは、聴者がすでに知っている、またはその文が発話されたときに当然のこととして受け入れうると話者が想定する、文の中に語彙的・文法的に呼び起こされる命題の集合である。この定義にもとづき、Li はこれら3概念を以下のように形式化している。

(5) 焦点=断定-前提

つまり、話者によって発話された命題(=断定)から、聴者が知っている知識(=前提)を差し引けば、残った部分が焦点となるわけである。機能文法的にいうならば、焦点とは或る発話内で新情報を担う要素であり、前提は旧情報に相当するといつてよいだろう。

音韻論的な観点から見ると、焦点は或る発話内でもっとも卓立した(ストレスを置かれた)

要素である。よって、焦点化要素はストレス付与される可能性があるが、必ずしも義務的ではないことには注意を要する。英語や中国語のような SVO 言語の場合、O がもつとも焦点になりやすい統語的位置だとはいえるが、必ず目的語にストレスが置かれるわけではない。文脈によってストレス付与される位置は変わりうるため、どの要素が焦点になるかは文脈に大きく依存している。

## 2.2 情動的焦点と対比的焦点

焦点の解釈に目を向けると、或る情報を初めて提示する場合の情動的（提示的）焦点 (informational focus) と、何らかの対立項目との対比を示す対比的焦点 (contrastive focus) とに区別される。文形式上、前者は単純な平叙文で示すことができる。(6)においては、文主語 (= 発話者) が聴者にとって前提ならば、述部「吃面包了」全体が情動的焦点となりうるし、発話者が何かを食べたことが前提ならば、「面包」が情動的焦点となる。

(6) 我吃面包了。(私はパンを食べた。)

一方、後者は、英語の *It is ... that* 分裂文のような特別な形式を用いるか、当該要素にストレス付与することで表現されうる。中国語では「是...的」構文(7)や「是」構文(8)などがあてはまるだろう。(7)では「在大学里」が、(8)では「明年」が焦点である。

(7) 我是在大学里认识他的。(私が彼と知り合ったのは大学でだ。)(Li 2008:763)

(8) 我是明年去法国。(私がフランスへ行くのは来年だ。)(ibid.: 766)

Li 2008 も言及しているが、英語研究においては、焦点化要素を調べる統語テストとして、*Wh* 疑問文が古くから利用されている。中国語でも同じ事実が観察される。(9)では A の問いに対する B の回答の述部全体が情動的焦点であり、(10)では目的語が焦点である。

(9) A: 你今天做了什么? (君は今日何をしましたか。)

B: 我看小说了。(小説を読みました。)

(10) A: 你看什么了? (君は何を見ましたか。)

B: 我看了日本电影。(日本映画を見ました。)

一方、(11)のような文脈では、B は A の目的語を訂正しており、目的語が対比的焦点である。

(11) A: 你是看了阿诺德施瓦辛格的电影吗?

(君はアーノルド・シュワルツェネッガーの映画を見たの。)

B: 不是。我是看了迪士尼的电影。(いいえ。ディズニー映画を見ました。)<sup>2)</sup>

最後に、情動的焦点と対比的焦点の相違について見ておく。(9)(10)では、情動的焦点 (B の

<sup>2)</sup> このような訂正を目的とした焦点は、訂正の焦点 (corrective focus) と呼んでもよいかもしれないが (Bocci et al. (2019:36)), (11)については対比的焦点として扱っておく。ただし、3.3 では、対比されるものが名詞句か時間表現かという類の違いと対比させる選択肢の多さを考慮し、対比的焦点と訂正の焦点を区別する。

下線部)は自動的に対比的焦点としても解釈されるわけでない。これらは *Wh* 疑問文に対する回答であり、A の発言内容の一部を訂正しているわけではない。つまり、単に新情報を提示しているにすぎない。一方(7)(8)は、(9)(10)のように新情報を提示しているのではなく、文脈上想起されるなんらかの要素との対比を示している。

情報的焦点と対比的焦点の違いは、後者のみ総記性(exhaustiveness)と排他性(exclusiveness)を満たすことである。たとえば、(9)(10)の B の発話においては、それぞれ小説や日本映画以外に、雑誌を読んだりアメリカ映画を見たりしていても、その発話の真理値は真であり、総記性や排他性を満たす必要はない。一方(7)では彼と知り合った場所は大学以外の場所であってはならず、(8)ではフランスに行くのは再来年であってはならない。それぞれ「在大学里」「明年」が唯一の場所・時間でなければ、(7)(8)の真理値は偽となる。

以上、2 節では、焦点とそれにかかわる概念を整理し、焦点には大きく 2 種類の解釈(情報的焦点と対比的焦点)が存在することと、対比的焦点となるためには総記性・排他性という解釈上の条件が満たされる必要があることを見た。

### 3. 「是」構文と時量詞構文

#### 3.1 問題提起

本節では、複合名詞句がなぜ時量詞構文に生起できないのかを考察する。まず、そもそも何が問題点であるのかを確認しておこう。

- (1) 我学了两个小时(的) 中文。
- (2)?\*我看了两个小时(的) 很厚的书。
- (3) \*我煮了三十分钟(的) 皮很硬的茄子。
- (4)?\*我看了两个小时(的) 最近出版的书。

これらの文の統語構造を見てみると、(1)-(4)の下線部は、カザリのタイプが異なってはいるが、内心構造としてはいずれも名詞句であり、文中で目的語という構成素となりうる。したがって、形式統語論的には(2)-(4)の文の容認度が低い理由を説明することは不可能だと思われる。

たとえば、生成文法理論における文派生のプロセスを考えてみよう。(説明の都合上、理論的背景等には触れず、簡略な解説にとどめる。) Chomsky 1995 以降のミニマリスト・プログラムにおいては、文を構築するプロセスとして重視されている操作(operation)は併合(Merge)である。大局的に述べると、語と語をつないでより大きな構成素を作り、それをさらに他の語や構成素とつないで、最終的に文が完成する。(2)を例にとると、概略(12)のような段階を踏んで文派生が進む。

(12) a.[NP [AP 很厚的][NP 书]] (目的語の形成)

b.[Adv 两个小时 (的) [NP 很厚的书]] (時量詞 (付加詞) と目的語の結合)<sup>3)</sup>

c.[VP 看了[Adv 两个小时 (的) [NP 很厚的书]]] (動詞と目的語の結合)

d.[TP 我[VP 看了[Adv 两个小时 (的) [NP 很厚的书]]]] (主語と述部の結合)

この派生において、理論的に許されない併合はないと思われる。つまり、統語論的には(2)-(4)の文は生成可能であると予測されるのである。しかし、実際には(2)-(4)は容認度はきわめて低く、観察的には、時量詞構文に複合名詞句は生起しないといつてよいであろう。したがって、これらの文の容認度の低さは構文の存在を仮定しない Chomsky 流の派生的理論では分析が困難であり、それ以外の観点から説明がなされるべきであろう。

### 3.2 作業仮説

本稿では時量詞構文における目的語名詞句にかかる制約について、文の情報構造の観点から解決を試みる。具体的には、時量詞構文における焦点が時量詞部分であることをつきとめる。1節で述べたように、名詞句のカザリは情動的価値が高く、情動的焦点となりうる。「很大的魚」と「魚」を比較されたい。)一文中に生起可能な焦点は一つのみであるとすると、もし時量詞構文における焦点が時量詞であれば、目的語はそもそも焦点にはならず、目的語名詞句内にも焦点を担う表現は生起しえないと説明することができる。これをモデル化したものが(13)である。

(13) 時量詞構文における二重焦点化制約

主語+述語動詞+[Focus 時量詞 (的)]+\*[Focus [Focus カザリ]+目的語名詞]

まず、一文中に二つ以上の焦点が生起しない論理的根拠を見ておく。左周辺領域(Left Periphery)のアプローチを採用する Rizzi (1997:297), Bocci et al. (2019:36)は、二重焦点化が論理的に実現しないことを構造的に論証している。<sup>4)</sup> 生成文法理論では X<sub>bar</sub>理論のスキーマを用いて句構造が表現される。焦点句 FocP (Focus Phrase)では、Foc(us)を主要部として、焦点を FocP の指定部(specifier)に、前提を補部(complement)に配置する。二重焦点化は概略 FocP1+FocP2 の連続と考えるとよい。

(14) [FocP 指定部 焦点 [主要部 Foc [補部 前提]]]

二重焦点化した場合の構造をモデル化すると以下のようなになる。

<sup>3)</sup> 時量詞の統語論的位置づけについては本稿では議論しない。「(的)」を伴うこともある)時量詞を名詞句の一部とみなすか、副詞的な要素とみなすか意見が分かれるが、ここでは便宜的に副詞 (付加詞)として表記しておく。

<sup>4)</sup> Rizzi らの理論も生成文法の枠組みではあるが、表示的アプローチを採用している点で Chomsky のアプローチと異なる。両者には概念上の相違はあっても理論的には矛盾しないが (Luigi Rizzi 氏 個人談話)、本稿では時量詞構文における情動的焦点が一つに限られることを明示的に示すために Rizzi らの表示方法を採用する。

(15) [FocP1 指定部 焦点1 [主要部 Foc1 [補部 前提 (=FocP2) ]]]

[FocP2 指定部 焦点2 [主要部 Foc2 [補部 前提]]]

破線部は FocP1 の補部に位置する前提とその内部構造を示している。2.1 節で確認したように、焦点は発話の断定から前提を差し引いた部分であり、焦点と前提は対立する概念である。(15)では FocP1 指定部を占める要素が焦点だとすると、その補部には必ず前提が位置しなければならない。その前提の中に別な焦点が生起することはありえないのである。なぜなら焦点は聴者が新たに知るはずの新情報であり、前提の一部として理解されるものではないからである。イタリア語の例(16)の太字部分が焦点、下線部が前提である。

(16) [A GIANNI] Foc [dovresti dare il libro t], non a Piero

‘TO GIANNI you should give the book not to Piero’ (Bocci et al. 2019:36)

(君はピエーロにではなくジャンニにその本をあげるべきだ。)

(16)の前提内部の *il libro* (本) を第二の焦点としたのが(17)である。「ジャンニに」と「その本を」が焦点化されているが、これは容認不可能である。

(17) \*[A GIANNI] Foc1 [[ IL LIBRO ] Foc2 [dovresti dare t]], non a Piero

‘TO GIANNI THE BOOK you should give not to Piero’ (ibid.)

中国語の時量詞構文においても、同様の効果が見られるようである。太字部分の両方にストレスを置いて二重点化すると容認されない。

(18) \*我学了两个小时**的数学**。(私は2時間も数学を勉強した。)

この例では目的語は裸名詞であるが、そもそも時量詞構文では二重点化は不可能だと考えてよい。しかし、この観察だけでは時量詞と目的語名詞のどちらが焦点をヨリ担いうる要素なのかは判断できない。特に対比的焦点の場合は文脈によって焦点化要素が変わる可能性があるからである。そこで、以下では、焦点を一つしか持ちえない「是」構文を利用して、時量詞構文において焦点になりやすいのがどの構成素であるか調査してみる。<sup>5)</sup>

### 3.3 考察

本調査では会話文を用いて、北京語話者(女性2名)と台湾華語話者(女性3名)のインフォーマントに、もっとも強意(ストレス)を置きうる箇所の有無、もっとも伝達したいと感じる箇所の有無、および、同一文中で二重点化が可能かどうかヒアリングした。もっとも伝達したいと感じられる構成素があれば、そこが時量詞構文におけるデフォルトの(情報的)焦点であると考えられる。また、Aの質問に対するBの回答において、ストレスを置いて答えたい箇所があるとすれば、(対比的)焦点となっている可能性がある。

用意した会話は4パターンである。すべての会話に一定の前提を与えた。

<sup>5)</sup> 対比的焦点は新情報ではないという見解もある。しかし、BがAの発話の一部を訂正して正しい情報を提供するとき、BはAの知りえなかった新情報を提示していると考えられる。



- 会話的前提: 約定不能玩两个小时以上的游戏。

(2時間以上ゲームをしてはならないと約束している。)

【会話1】

A 你是玩了两个小时(的)游戏吗?

B 【没有。/不是。】我是玩了一个小时(的)游戏。<sup>6)</sup>

(lit. A : 2時間ゲームをしたの? B : いいや。1時間ゲームをしたよ。)

【会話2】

A 你是玩了两个小时(的)游戏吗?

B 【没有。/不是。】我是玩了三个小时(的)游戏。

(lit. A : 2時間ゲームをしたの? B : いいや。3時間ゲームをしたよ。)

【会話3】

A 你是玩了两个小时(的)游戏吗?

B 【没有。/不是。】我是学了一个小时(的)数学。

(lit. A : 2時間ゲームをしたの? B : いいや。1時間数学を勉強したよ。)

【会話4】

A 你是玩了两个小时(的)游戏吗?

B 【没有。/不是。】我是学了三个小时(的)日文。

(lit. A : 2時間ゲームをしたの? B : いいや。3時間日本語を勉強したよ。)

これら4パターンの関係についてまず解説しておく。会話1・2では目的語名詞は共通しており時量詞のみが異なる。会話の前提に照らしてBの回答を見たとき、インフォーマントは時量詞に注目する可能性が高い。しかしこれら2例だけでは初めから時量詞が焦点であることを前提とした意図的な調査になりかねない。そこで会話3・4を用意した。これらはA/Bの会話において時量詞も目的語も異なる。Aにはゲームを2時間したのか尋ねたい意図があるのに対し、Bはその期待に反する回答をしている。この場合は述部全体または少なくとも

---

<sup>6)</sup> Bの回答の冒頭の否定表現についてはインフォーマントによって判断に差がある。「不」と「没有」の相違については先行研究は多い。Li and Thompson (1981:421)は「不」を中立的否定、「没有」は出来事の完了の否定と述べている。Lin (2003:428)は「不」は非限界的な(unbounded)状態を否定するのに対し、「没有」は限界的な(bounded)出来事を否定すると述べている。網羅的なまとめとしては Xiao and McEnergy (2010:128)を参照されたい。そこでは「没」は状態の実現を否定するのに対し、「不」はもっと広範囲の文脈を否定すると指摘している(可能性、必要性、特性、位置付け、意志、判断の真偽など)。彼らによると、先行研究は「不」と「没(有)」の違いを、状態(stative)・動体(dynamic)、未完了(non-completion/atelic)・完了(completion/telic)、非限界的(unbounded)・限界的(bounded)という対立軸で捉えているようである。本稿では紙幅の関係でこれらの問題についてはこれ以上の言及は避け、議論は別項に委ねる。

目的語名詞句のほうを訂正し焦点化したいのではないかと予測できる。この環境で目的語名詞句のほかに時量詞も焦点化しようとするれば、(13)の二重焦点化制約に違反することになり、文は容認されない。

これらの会話文において「是」構文を用いたのは、この構文は焦点化要素を一つしか持ちえないため、原理的に二重焦点化は不可能なはずだからである。また、「是」構文は「是…的」構文とは異なり、動詞の前後の位置にかかわらず、動詞以外のあらゆる要素を焦点化しうる構文でもある。談話論的には、同一文中に情報的焦点と対比的焦点が共起することはある。この場合通常ストレスが置かれるのは対比的焦点ではあるが(Erteschik-Shir 1997:11f)、これにより、時量詞と目的語のどちらがデフォルトの(情報的)焦点となる可能性があるかを調べることができる。

結果から述べると、一定の文脈(会話の前提)を与えても、インフォーマントの判断は個々の主観にもとづき多様であったが、インフォーマントはBの回答の中の或る構成素に対して心理的に反応していることは明らかとなった。インフォーマントの判断をまとめると以下のようになる。

表1 インフォーマントが心理的反応を示した構成素

インフォーマント	会話1	会話2	会話3	会話4
A	時量詞	時量詞	時量詞	時量詞
B	時量詞	時量詞	時量詞/目的語	時量詞/目的語
C	なし 時量詞	なし 時量詞	なし 時量詞/目的語	なし 時量詞/目的語
D	なし	なし	時量詞/目的語	時量詞/目的語 なし
E	時量詞	なし	なし	なし

※「なし」: 特にストレスを置く必要性を感じない。

この表からわかるように、いずれの会話でもインフォーマントが時量詞になんらかの心理的反応を示していることがわかる。(C,Dのインフォーマントは2通りの判断を示しているが。)つまり、時量詞部分がもっとも際立った文の焦点化要素であることを示唆している。インフォーマントごとの差異については以下でその可能性を分析する。

会話1・2では目的語は一致しており、情報価値があるのは時量詞部分である。会話1では約束を守って2時間以内でゲームを終えている。だから特に強調する必要はないという判断と、約束を守ったというよい報告をしているからこそ時量詞を強調すべきだという判断があった。いずれにせよこの会話においてゲームをすることは前提であるので、目的語にストレスは置かれぬ。そうすると、「是」構文において焦点化されているのは時量詞だということになる。

一方、会話2では約束を破って長時間ゲームをしてしまったという好ましくない行いをしたため、わざわざ時量詞にストレスは置かないという意見はあったが、時量詞に情動的価値があることは会話1と変わらない。なぜなら目的語名詞句はAの発話と変わらないが、ゲームをした時間が長すぎたという負い目を一部のインフォーマントが吐露しているからである。

ここで注意すべきことがある。ストレスが置かれる要素は対比的焦点と考えられるが、時量詞は名詞句などのように選択的焦点(selective focus)にはなりにくいと思われる。名詞句であれば、文脈上想定される何らかの候補の集合は比較的小さく、対立候補を絞り込める。(19)では対立候補が二つしかなく、かつ両者とも明示されている。

(19) A: Who wants to marry John, Janet or Ann?

B: JANET wants to marry John. (Erteschik-Shir 1997:12)

一方、時間の長さは段階的(gradable/scalar)であり、1秒単位まで考慮すると対立候補となる選択肢は極めて多い。会話1・2では時量詞以外の部分は前提である。時量詞部分は選択的焦点というよりは、訂正の焦点(あるいは情動的焦点)であると考えるのが妥当であろう。

会話3・4では時量詞も目的語もAの疑問文とは異なっており、述部全体が訂正されている。会話3では、遊びではなく勉強をするという好ましいことを行なったのだから、時量詞と目的語の両方にストレスを置きたいという判断が出てくるのは予測しやすい。ただし目的語にのみストレスを置きたいという判断もある。これは、AとBの目的語が異なるため、述部の中心的要素である目的語のほうが焦点化された結果であると考えられる。時量詞は付加詞であり、他動詞によって常に選択されなければならない義務的要素とはいえないからである。

この判断は、時量詞・目的語のいずれにもストレスを置かないというインフォーマントの解釈に通ずるところがある。なぜなら、Aの質問に対し、Bはまったく異なる出来事を提示し回答していることから、Bの発話の述部全体が新情報としての情動的焦点であると理解することができるからである。(新情報は必然的にストレスを伴うとは限らない。)

同様に、会話4でも好ましい活動を行ったことから、時量詞と目的語の両方にストレスを置きたいという判断が見られた。ストレスの置き方に違いはあれど、会話3・4は動詞を含む述部全体が訂正の焦点となっていると考えられる。このとき勉強した時間の長さではなく、勉強したことを伝達することに重きが置かれるため、目的語にストレスが置かれやすいといえるだろう。逆に、会話3と同様に、いずれの要素にもストレスは置かないという解釈も見られた。この場合はBの発話の述部全体が新情報として理解されていると考えられる。

今述べたように、会話3・4に共通することは、ストレスの置かれる位置はともかく、訂正されている箇所が述部全体である可能性があるということである。そうすると、情動的焦

点（または訂正の焦点）の内部に複数の訂正の焦点が存在することになるが、上述のように情報的焦点以外の焦点は談話論的に複数生起する可能性がある(Erteschik-Shir 1997)。3.2 節で議論した FocP は焦点の構造的認可条件ではあるが、訂正の焦点は FocP の指定部・補部の関係には入らないと仮定すると、以下の情報構造が考えられるだろう。

(20) 主語+[Informational Focus 述語動詞+[Corrective Focus 時量詞 (的)]+[Corrective Focus 目的語名詞]]  
 会話 1・2 の場合と同様に、時量詞部分を対比的焦点と考えるには対立候補の範囲が広すぎる。また、会話 3・4 では述語動詞自体も訂正されているため、いくら文脈が設定されていたとしても、「ゲームをする」以外の述語動詞と目的語を、文外の何かと対比して選択することは困難であろう。このように、一定の文脈の中に時量詞構文を入れてみると、情報的価値が見出されるのは目的語名詞句ではなく時量詞のほうであると考えてよさそうである。

### 3.4 複合名詞句の問題に戻って

さて、3.1 節で指摘した(2)-(4)の複合名詞句の容認度の問題に戻ろう。

- (1) 我学了两个小时 (的) 中文。
- (2)?\*我看了两个小时 (的) 很厚的书。
- (3) \*我煮了三十分钟 (的) 皮很硬的茄子。
- (4)?\*我看了两个小时 (的) 最近出版的书。

これまでの議論では、時量詞構文における焦点化要素は時量詞である可能性が高いことを見てきた。また、名詞のカザリは情報的焦点になりうることと、種類の異なる焦点は共起可能であるが、FocP によって認可される同種の焦点とは共起しないことを指摘してきた。そこで、3.2 節で提案した(13)のモデルを以下のように修正しよう。

#### (21) 時量詞構文における二重焦点化制約 (修正案)

主語+述語動詞+[Informational Focus 時量詞 (的)]+\*[Informational Focus [Informational Focus カザリ]  
 +目的語名詞]

カザリのついた目的語名詞句全体はその内心構造から、全体が情報的焦点となる。なぜなら、カザリは名詞に何らかの情報を付け加える情報的価値を担っているからである。本稿の実験から明らかのように、時量詞構文では時量詞が情報的焦点を担うとすれば、同種の焦点が共起することから(2)-(4)は容認されないことになる。

(2)-(4)の目的語名詞句部分だけを抜き出してみると、それらは名詞句としては成立する。しかし、(2)の属性規定的連語、(3)の特徴規定的連語や(4)の关系的連語は名詞のなんらかの性質を詳細に記述する名詞連語であって、対比焦点解釈を導き出すための連語ではない。これらの連語が構成される時、必ずカザリにストレスが置かれるわけではない。その意味で上述のとおり、これらのカザリは名詞に追加情報を付加する情報的焦点と考えたほうがよいであろう。これらの名詞連語が時量詞構文に生起するといずれも確実に容認度が下がることから、

時量詞構文は時量詞を焦点化し、時量詞以外の部分を前提とする構文であると仮定すると、本稿の考察した言語事実をうまく説明できる。

一方、(1)のような裸名詞の場合は以下のような構造が考えられるだろう。

(22) 裸名詞の時量詞構文の情報構造

主語＋述語動詞＋[Informational Focus [Informational Focus 時量詞 (の)]＋[目的語名詞]]

この場合は情報の焦点が一つしか存在せず、容認可能となる。

#### 4. まとめ

本稿では、時量詞構文を特定の文脈（会話）の中に入れ、どの構成素が情報の焦点になりうるかを検証した。その結果、時量詞が他の要素よりも焦点になりうる可能性が高いことを見出した。そうすると、その他の要素は前提となり、原理的に前提の内部に別の焦点は生起しえないことから、時量詞構文では二重焦点化は起きえないことを見た。このことは、時量詞以外の部分に情報的に卓立した要素が現れにくいことを示唆する。これが、(2)-(4)のような属性規定的連語、特徴規定的連語、関係的連語などの複合名詞句が時量詞構文に生起しえない理由であると考えられる。

#### 参考文献

- Bocci, Giuliano, Luigi Rizzi and Mamoru Saito (2019) On the incompatibility of wh and focus, *Gengo Kenkyu* 154:29-51, The Linguistic Society of Japan.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Erteschik-Shir, Nomi (1997) *The Dynamics of Focus Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley and Los Angeles, LA: University of California Press.
- Li, Keneng (2008) Contrastive focus structure in Mandarin Chinese, *Proceedings of the 20th North American Conference on Chinese Linguistics* Volume 2:759-774. Ohio State University.
- Lin, Jo-Wang (2003) Aspectual selection and negation in Mandarin Chinese, *Linguistics* 41-3:425-459.
- Rambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge/New York/Melbourne: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery, In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: A Handbook of Generative Syntax*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Xiao, Richard and Tony McEnery (2010) *Corpus-Based Contrastive Studies of English and Chinese*. New York: Routledge.